

司会（加藤）

それでは、本日の講演のまとめを大学評価・学位授与機構 理事の川口 昭彦よりさせていただきます。

川口

ただいまご紹介いただきました川口でございます。誠に僭越ではございますが、本日の講演のまとめを簡単にさせていただきます。

まず、最初に、私どもの機構を代表いたしまして、劉先生はじめ中国からお越しいただいた方、皆様方に厚く御礼申し上げます。また、中華人民共和国駐日本国大使館、公使参事官の李様にも厚く御礼申し上げます。

このシンポジウムは、昨年アジアにおける大学評価シリーズということで計画してまいりました。今回は特に、中国の高等教育政策あるいはその評価システムの全体のことを話していただくということ、それから、実際に評価を実施されている方にも是非来ていただいております。また、評価を受けた大学の方からにも是非お話を伺いたいということをお願いしましたところ、本日のように、3名の方から充実した非常に印象的な話を伺いました。

国際的なあるランキングで中国の大学が非常にめざましい結果を出しているということは皆様既にご存知だと思いますが、私自身、本日3名の方のお話を伺いまして、その躍進の原動力というものが非常に感じられました。しかも、評価というものが、その原動力になっていたことを非常に強く感じた次第でございます。これが第一点でございます。

それから、もう一点は、実は驚くほどと言ってはちょっと失礼かもしれませんが、日本の私どもが今やろうとしている評価システムあるいは日本の高等教育システムと、中国におけるそれらには共通性があるという点が非常に印象的に伺いました。

それで、本日のご講演のどの辺りに私自身が非常に感銘を受けたかということをお一人ずつ簡単にコメントをさせていただきます。

最初の劉先生についてですが、実は中国では評価というものに非常に長時間をかけて慎重に取り組んでいらしたということ、これはスライド6及び8をご覧くださいと、歴史から見ますと1994年からお始めになっていらっしゃいます。これは実は日本よりもずっと古いのです。日本では2000年になる頃に、私もある検討会議に取り込まれて検討を始めましたが、それよりも前に、1985年から、まず、いわゆるその理論の研究を始められて、その後、1994年から実際のいわゆる試行的実施をされたということです。

私どもの日本の状況と比較しますと、ちょうど私どもの機構ができました2000年から、いわゆる国立大学あるいは公立大学を対象とした試行評価を行いました。その結果を私どもは検証いたしました。その検証結果と、実はスライド11のこの評価による効果、実はこ

れと非常に同じような効果が出ていました。例えばそこにありますように、大学の運営方針が明確になったとか、あるいは、教育の質の向上に非常に役に立ったということは私どもの検証でもはっきり出ていました。

唯一違うところ、あるいは羨ましいなと思いますところは、3つ目の教育業務に投入する資源の増加、これは我が国にはなかったかなという点は大変残念でございますが、これ以外はその試行の検証結果と似ていると、私は非常に印象的に伺い、評価というものは、意外に万国共通なのかなと思うと同時に、ここまで非常に慎重に積み上げられたプロセスに大変私は感銘を受けました。

実は昨年、このアジアの大学評価シリーズで台湾を取り上げました。その時に私が非常に驚いたのは、例えば台湾の評価システムを導入するスピードが非常に速いということです。その時に、こんなスピードで果たして大丈夫なんだろうかと思ったぐらい、非常に速いスピードだったのです。やはりそれを考えますと、中国というのは日本や台湾に比べると非常に大きな国です。しかも、非常に多様な国だと思います。じっくりと評価システムを導入するためには、やはりこれだけのエネルギーとこれだけの時間というものが必要なのではないか、我が国は、面積は小さいかもしれませんが人口という意味ではかなりのものだと思いますので、日本でもやはりこれだけの地道な積み上げというものが必要なのではないかなということを非常に感じました。これが1点目でございます。

それから、お二人目の任先生の講演で非常に私が感動をいたしましたのは、いわゆる分野別のランキングのところ、これはランキングといいますと、必ずネガティブなように受け取れますけれども、このおやりになったシステムを見せていただきますと、やはり非常に合理的に出来上がっているのではないかと思います。私は、これからの我が国の評価の上で、このように非常に合理的に積み上げて、評価する項目を考えながら、しかも比重まで非常に考えられているというのは、非常に参考になったのではないかなと思ひ、やはりこういうものが、先ほどお話いたしました中国の躍進の原動力になったのではないかと、ひしひしと感じた次第でございます。

これは、今後私どもの評価を進めていく上で、非常に参考になったのではないかと感謝しておりますし、本日は言及されませんでしたけれども、おそらくこれだけの評価を進めていくためのデータベースと言うのでしょうか、この基礎となるデータベースをかなり地道に収集されているのではないかなと想像した次第でございます。

それから、最後にお話しされました李先生の話は、私も全く同じ意見でございます。こういうコメントがございました。評価によって、業務遂行を推進し、改革を促進するのである。これはまさに、私どもが評価を進める上で言っていることと全く同じでございます。評価によって大学というものがさらに発展していくということ、これはやはり非常に重要なポイントであり、かつ、この同済大学の中で合理的に自己評価システムをお作りに

なり、それをやられているということには、これから私どもが大いに学ぶべきことではないかなと考えた次第でございます。

それで、まとめといたしまして、3名のお話を伺いまして、私は、全体的にこの評価システムがかなり合理的に構築されていて、その成果が今もうすでに出ている、それから、今後もおそらく出るだろうということを非常に印象的に伺いました。

最後にもう一度、遠路遥々中国からおいでいただきました、5人の方にあらためてお礼を申し上げまして、簡単ではございますが、私のまとめとさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

司会（加藤）

ありがとうございました。それでは最後に、大学評価・学位授与機構 理事の山本 順二より閉会の挨拶を申し上げます。

山本

本日は最後まで熱心に講演会にご参加いただきまして、誠にありがとうございました。本日の講演会を通じまして、中国の高等教育の発展の姿というものが皆様方にとってよりいっそう明らかになったものだと考えております。

特に目を見張る量的な拡大と、その質を確保するための取り組みというものにつきましては、高等教育をめぐる状況というものが異なるといえども、我が国の高等教育に参考になる面が多々あるのではないかと、このように考えております。

いずれにいたしましても、私ども機構が取り組んでおります国境を越えた高等教育の質の保証というものを、いっそう確実なものにしていくためにも、お隣中国をはじめ、世界各国と共同して取り組んでいく必要があるのではないかと考えております。

私どもは、高等教育の質保証に関する世界ネットワーク、あるいは OECD やユネスコの活動に積極的に参加するとともに、二国間事業にも積極的に取り組んでおります。8月にはやはりこの会場でございましたが、米国から FD の専門家を招致いたしまして、学生による授業評価のワークショップを開催いたしました。それから、9月にはノルディック 5 か国から専門家を招致いたしまして、やはり高等教育の質保証に関しまして共同のワークショップを開いたところでございます。そして、今回、中国との交流という運びになったわけでございます。

さらには、2008年の2月になろうかと思いますが、アジア太平洋地域の高等教育の質保証を目指して立ち上げられましたアジア太平洋質保証ネットワークの総会を東京で開催すべく準備をしているところでございます。また、重ねてのご案内でございますが、来年の2月に、これは大阪でございますが、私ども、「大学評価への期待」と題しまして、シンポ

ジウムを開催する予定でございますので、ご関心の向きは是非ご参加いただきたいと思いますと思います。

最後になりますが、本日、お話をいただきました中国側のお三方、劉様、任様、李様に心から御礼申し上げますとともに、最後まで熱心にご参加いただきました皆様方に熱く感謝を申し上げまして閉会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会（加藤）

以上を持ちまして、公開講演会、「高等教育における中国の躍進」を終了させていただきます。本日は長時間にわたり、誠にありがとうございました。